◉報告

香港ザ・ポップ——記憶と虚構のはざまで——

池上貞子

はじめに

二〇〇五年夏のおわりの現在、筆者は在外研究のため香港に滞在中である。「張愛玲と香港」をテーマに、張愛玲の人生や文学にとって、彼女の三度の香港滞在がどんな意味をもったのか、現場の空気のなかで考えてみたいと思っている。ただし広東語はできない。これまで香港について真正面から研究してきたわけではない。ポップ・カルチャー（流行文化、普及文化、大衆文化、通俗文化）に関わる項目（アート、映画、テレビ、音楽、漫画、ファッション、食べ物などなど）について、香港どころか日本にいてさえ、そう自覚的・意識的ではない。そんなこんなで、毎日の生活は、周囲の出来事に対して文字通り生半可な理解のうちにすぎている。たとえば流行文化／ポップ・カルチャーを語ろうとしても、靴の底から足の裏をかくようなもどかしさばかりだ。

一方、香港映画に関しては専門家やマニアも多いし、食べ物やファッションは専門雑誌の香港特集や旅行書などに、つねに今日的なスタンスで詳しく紹介されている。お門違いの人間に原稿を書かせようとした「チャイナ・ポップ」特集の企画・編集担当者の意図もよくわからないし、引き受けた方も引き受けた方だが、すこしだけまったく無意味ではないかもしれないと思う点もある。筆者の在外研究先の引受人である嶺南大学の梁秉鈞教授（詩人・小説家の也斯）は、香港が「文化沙漠」と呼ばれることに対してずっと異議申し立てを行ない、そのための努力を続けている人である。筆者は数年前から氏の原稿を翻訳する作業を通して、そうした姿を垣間見てきており、現在は身近でその奮闘ぶりに接している。とうぜん、香港には、あるいは氏の周辺には、同じような考えをもって憂え、発言し、努力している人たちがいる。それらの状況を含めて語るという間接的な方法なら、視野のなかに何とかポップ・カルチャーを捉えることできるかもしれない。そんな頼りない期待をもってこの一文を記する次第である。非力な筆者がそれを試みるのはとても僭越なことであるのだが、台湾が日本で理解されるためにたいへんな努力をされている企画者への敬意の意味もある。

香港的風景——山と高層ビルの共存（新界屯門）

ところで筆者が日常生活のほとんどを送っているのは、新界の屯門にある嶺南大学の周辺で、一般的に「香港」という言葉でイメージされる香港島や九龍からは、電車やバスで一時間くらいかかる。至るところ山と高層ビルが共存している香港では屯門の景観も例外ではないが、ビルがオフィス・ビルではなく、ほとんど住宅であることが、郊外あるいは田舎らしいと言えば言える。ちなみに大陸との出入り口である羅湖までは、バスと鉄道を乗り継いでも四〇分とはかからず、香港の中心地より近い。こんな環境に加えて本人がまた出不精ときているので、「香港」の流行文化とはあまり縁のない生活をしていることは想像いただけると思う。それで現地発レポートの発信者としての責めをふさぐために、若者、とくに身近にいる大学生たちの語った「香港の今の流行」を紹介し、と同時に、それに対応する大人たち、いわゆる識者の考え方を探ってみることにした。その前に、筆者のこれまでの五か月間にわたる香港生活の、素朴な感想を述べることを許していただきたい。

一　香港生活所感

まずは、体感から。これまで、日本で言えば、春から夏の終わりにあたる季節の時期を体験したところであるが、正直これほど蒸し暑いとは思わなかった。五月ごろの湿度七五パーセントに驚いていたら、やがて八〇パーセント台、九〇パーセント台になり、一〇〇パーセントという日もあった。これに三〇度前後の温度が加わると、存在しているだけで汗が流れてくる。一方、香港の冷房の強さは旅行案内にも注意が載っているほどで、現地の人でも映画館などに行くときは、セーター類をもっていく。だが、天候が変わりやすいことは、それ以上に想像のほかであった。後から考えてみたら、張愛玲も「沈香屑：第一炉香」という小説のなかで、「香港の天気と香港の女の子」という英語のはやり言葉があると書いていたのだが……。こちらでは人と会う約束をするとき、具体的なことはほんの間際、時によっては数分前に決める。もう少し前から決めておいた方が何かと予定がたって便利だろうと思うのだが、その実、天候の関係で間際になって変更やら取りやめという経験もしばしばし

てみると、なるほどと思ってしまう。つい最近では、日本の研究会仲間の若い人が尋ねてきてくれたので、一週間くらい前からかなり具体的な予定を決めて楽しみにしていたら、当日は朝から強い風雨で、とても外を出歩くような日ではなかった。結局、その日の朝になって、あわてて会う時間から行動内容まですっかり変えた。

この日はまた、別におもしろい経験をした。その友人を香港人の知り合いに会わせるために、屯門の町中で昼食をすることになった。電話の打ち合わせのなかで、筆者が台風模様の日にレストランが開いているだろうかと心配すると、香港人の知り合いが笑いながら言った。「あなたはまだ香港や香港人というものがわかっていない。自分はむしろ空いている席があるかどうかの方を心配する」というのである。結果はもちろんその人の言うとおりで、屋根のあるところはどこも溢れる人の波。大規模な飲茶レストランなのに三〇分ほど待たなければならなかった。この心理や、先ほどのべた比較的間際になって約束をする習慣などは、天気は一一月くらいからは定まってくるそうだし、大陸でも似たような体験があったから、天候だけの理由ではないかも知れない。一考に値すると思う。

もうひとつは〝普通話〟の使用状況で、これほどまで通じないとは思わなかった。筆者は一九七三年の二週間の滞在を最初として、その後何度か香港での数日間の滞在を経験しているが、たいてい簡単な用事だけだったので、それほど実感がなかった。が、今回、滞在先の嶺南大学の関係者との話し合いをふくめ、かなりつっこんだ話をする必要ができてみると、少なくとも十代半ば以上になってから大陸を出てきた人たちは流暢だが、香港生まれ香港育ちの人は、年齢に関係なく得意とは言えない。

一九九七年の中国への復帰から八年、〝普通話〟の授業をする学校が多くなったようなので、今後はすこしずつ状況が変わっていくのだろうと思うものの、事はそう単純ではないらしい。日用品の買い物など庶民レベルの生活では、〝普通話〟しか話せない人間はしばしば内地(大陸)から来た田舎者という扱いを受ける。「そういう時はすぐに英語に切り替えると態度が変わる」という体験者もいるが、筆者は何となくそうできないでいる。中国語圏イコール〝普通話〟文化圏のように思い込んでいた自分を反省するとともに、これは非常に微妙な問題のように思った。事が学術交流などのレベルになると、このところの華人社会の相互交流における大陸の学者の参入ぶりを待つばかりでなく、共通語としての〝普通話〟の意味は大きいはずだ。これについてもちょっとした経験をした。普通話/広東語併用という案内のあった「文学の創作と鑑賞」に関するシンポジウムを聞きに行ったところ、二時間の発表・討議すべてが広東語で行なわれ、筆者はほとんど理解できなかった。たまたま筆者と知り合いだったパネラーのひとりの在米学者が、最後の最後に〝普通話〟で、「会場にはせっかく〝普通話〟のわかる日本人の研究者も来ているのに、広東語がわからないために、議論に参加できないでいる。こういうやり方は互いにとって惜

しいことであるから、今後考慮の余地があるのではないか」と発言した。すでにとりまとめにかかっていた司会者はそのまま広東語で話を続け、散会にした。あとで、いっしょにいた友人に聞いたところによると、たしかに〝普通話〟も大事ではあるが、広東語も優秀な言語であるとして、何だかよくわからないうちに終わりにしたのだそうだ。当日の論議の中心は方言で創作した場合の普遍性の問題だったそうなので、翻訳の際などにその問題で頭を悩ますことの多い筆者としては、興味のある話題であったが、まさにそのことが原因で聞き取れなかったのは皮肉である。

そのほかこちらに来て印象的なことは、日本社会の単一志向に対して、さまざまな場面で多元的・重層的だということだ。まずは言葉の問題。大学の公文書は英語、必要に応じて中国語も併記されている。交通機関、とくに電車、地下鉄での案内は広東語、〝普通話〟、英語の三種類で行なわれる。個人の名前は基本的にはみな漢字で表わす中国語名なのだろうが、英語名ももっていて通称にしていることは、香港の映画スターの例でおなじみだ。これはスターに限ったことではなく、ほとんどの香港人に共通の状況だ。身分証にしても、ほとんどの人が大陸に自由に出入りできる〝回郷証〟もあわせもっている。香港全体での比率はわからないが、大学関係者の場合、かなりの家庭で家族が海外にいて、家庭が多元的である。作家はたいてい大学の教員とか、新聞雑誌の編集者とか、たいてい別の仕事も持っていて、専業の人は非常に少ない。しかもひとつのジャンルだけという人は少なく、小説も詩も評論も書く……。ちなみにわが也斯氏は大学教授で、詩人で、小説家で、エッセイストで、最近は写真集も出している。これはけっして特異なケースではなく、嶺南大学中文系の教員のうち、半分近くが詩人・小説家としても活躍している。

こういうダブル・スタンダードというか、物事の規定が弾力的というか価値観の多様な社会に身をおいていると、対極にどこかで「こうでなければならない」という思いにとらわれている自分（もしかしたら多くの日本人）の姿が浮かび上がってくる。流動性の少ないなかで、単一・同一の価値観で物事を運んでいて、すこし硬直的かもしれない。細かなところにこだわって四苦八苦している……。しかし、香港の人々は日本／日本人のそうした作風に対し、〝小気〟（みみっちい）とは言わず、〝精緻〟だとか〝有骨子〟（精緻の意味の広東語）という言葉で受け止めていてくれる。

ついでながら大学で学んだ経験を持ち、現代中国文学に関しても比較文学的なアプローチが盛んで、研究方法も理論重視である。これはある時期まで資料収集に限界があった台湾でも顕著な傾向であるが、香港の場合は歴史的な事情からくる伝統でもあるのだろう。現在はインターネットなどで情報が得やすくなっていることも関連しているのだろうか。若い研究者などには、どちらかと言えば実証主義的な日本の研究を軽視する向きが感じられなくはない。

こうしたさまざま想いの交錯する日常生活のなかで、筆者にとってちょっと印象深く思った流行文化について、とりあえず二点だけふれてみたい。韓国のテレビドラマ「大長今」（邦題「宮廷女官チャングムの誓い」）のブームと人気俳優劉徳華（アンディ・ラウ）のことである。四月はじめに筆者が香港に来たとき、韓国のテレビドラマ「大長今」を放映中で、たいへんな評判になっていた。一時は視聴率が過去最高に至ったという。日本や韓国でもともと週一回半年とか一年間放映されていたものを、週末を除いて毎日連続して放映する場合があり、そんなときは集中度が高い（そのぶん、潮が引くのもはやいような気がするが）。新聞や雑誌の娯楽記事では出演した俳優に関することがよく話題になっていたし、本や漫画も何種類も出ていた。一方で、テレビは年寄りや〝師奶〟（おばさん）たちの暇つぶしだという若者もいたが、大学人の間でも会食の席などでよく話題になった。

この宮廷の調理人を経て宮廷医になった女性の一代記である「大長今」が香港で受けた理由として、筆者の周辺であげられていたのは、「食べ物にたいするこだわりや医療知識などが、同じようなこだわりをもつ香港の人たちの関心を集めた」、「韓国の時代劇ということで、新鮮な感じがし、また背景にある儒教思想や人間関係の葛藤はおなじみのものであるので、親近感を持って見られる」などというものだった。筆者は一部しか見ていなかったので、本を買って読んでみたら、要するに女性の自立が困難な時代に努力して宮中医となり、恋愛をし、家庭も持ちながら後進の指導に当たるという、とても現代的なテーマであった。女性の発言権も強い香港ではこんなことも魅力なのだろう。識者（演劇家の林奕華）も「女性を元気づけるドラマ」とし、それは単に女性の考え方をサポートしているだけでなく、女性が自分たちの理性美をどう表現するかという手本を示してくれていると捉えている。単なる女の戦いでおわらせずに、主人公が男に頼らず、自己改革によって、自らの環境や運命を変えていっている、という意味の評価をしていた。[1]

新聞などでもブームの分析がいろいろなされていたが、筆者がたまたま目にしておもしろかったのは、『太陽報』のアンケート調査で、事業として行なう側の視点から調査を行なっていた。そこでは、「大長今」の人気の原因として、四五・一パーセントの人が「製作の仕方がまじめで、背景や道具類、アングルや選曲の仕方も優れている」、三〇・七パーセントが「題材が新鮮で、多元的。ストーリー展開もすばらしい」、一一・一パーセントが「韓国政府の援助の力が大きく、うまく各国市場に入り込んでいる」というものだった。その他のアンケート項目は事業としてのあり方を問うものがほとんどで、新聞社の分析結果としては、高視聴率の理由について、「当地の製作者は、政府の映画テレビ界に対する協力が足りないために、『大長今』に匹敵するような優秀な作品が出ないのだと言っているが、太陽報の一般市民へのアンケート調査の結果によると、大半の市民は香港映画テレビが不振なのは、当地の製作レベルの低さと創意工夫の欠如によるものと考えている」としている。[2]

一説には、このあと日本の「大奥」という連続ドラマを放映する予定だったが、四月はじめから始まった反日の空気に考慮して、引き続き韓国の時代物「医道」に差し替えられたといわれている（結局、九月後半から放映）。「大長今」のヒロイン役の女優李英愛（イ・ヨンエ）は放映が終了してしばらくたってから来港したが、数年前の日本でのペ・ヨンジュン騒ぎに匹敵するくらいの熱狂的な歓迎ぶりだった。それ以前、放映の最中には脇役や子役の俳優が香港に来て、さまざまな催しに出席していたが、折からの反日ブーム(?)で、娯楽面の記事も「韓国の俳優たちも抗日をしなければならないと言っている」という内容になり、日ごろあいまいにされている、アジアにおけるある構図が明白になって、日本人としては複雑な思いだった。

ところで、テレビや街の広告、新聞の娯楽欄、雑誌などで、劉徳華の姿をよく見かける。ふつう張学友（ジャッキー・チュン）、黎明（レオン・ライ）、郭富城（アーロン・クォック）とともに香港芸能界の四天王と称されている。記事のなかで「華仔」というニックネームが踊っているので、中国男児の代表のように扱われているのかと思ったら、どうも考えすぎのようだ。〝仔〟は子ども、とくに男の子や若者を親しみをこめて呼ぶときに使われるし、考えたら彼の名前には華の字が入っていた。さしずめ、「華クン」というところか。

今年の第二九回香港映画祭でも彼を焦点俳優としてとりあげていた。一連の出演作品を放映してその成長と精進の軌跡を紹介するとともに、「スター性と演技」というテーマのシンポジウムを行なうなどして、単なるかっこいい人気スターではなく、香港を代表する俳優としての位置づけを行なっていた。(3) ある評によれば、彼は「勝気で、自信家で、有り余るエネルギーをもち、つねに積極的」というスタンス（信念）で悲劇の英雄を演じ、八〇年代には「劉徳華」という形容詞になっていたという。その後の「英雄のいない時代」への転換のなかで、彼は「演じずに演じる」演技派へと変化をとげ、現在は香港の文化コード（符号）となっているが、かつての悲劇の英雄の姿も永遠に内包されているとする。(4) いずれにせよ、多くの評は、七、八〇年代に活躍し、今はハリウッドに活動の拠点を移している

香港四天王のひとり劉徳華（地下鉄構内の時計広告）

周潤発（チョウ・ユンファ）の後継者という捉え方をしている。

また、ポップ・カルチャー（普及文化）を論じる側からは、彼の人気はみんなが同じような生活を送り、「普通の人」の意識をもっている都市生活者の集団社会と関連しているとする。「集団社会の人間は、現代社会の生産品であると同時に、消費者でもあり、大衆文化という商品もこれらの自己イメージや歓び、恐れを忘れることはない。ある古代ギリシャの哲学者はこう言っている。もし豚が宗教崇拝を行なうことを知っていたら、最も典型的な豚を崇拝しただろう。だから、人間という宗教崇拝を知っている動物の場合も、もっとも典型的な人間を崇拝するしかないはずだ。思うに、劉徳華の成功は、大衆文化が彼を最も典型的な現代の香港人として包装したということである[5]」。

右のたとえがいいのか悪いのかわからないが、つまり、五、六〇年代におけるアメリカの大衆文化のなかでは、「となりの男の子」がかつての白馬の王子にとってかわった。劉徳華の形象は、まさにその「となりの男の子」で、姿形、声も、突出したところがなくて、とても自然な感じ、自分と同じであるというような感じにさせる。劉徳華は〝平庸〟（平凡さ）のひな型で、いっしょにいても相手に脅威を感じさせない。ただし、平凡さは生まれつきだとしても、彼のえらいところは、本人のたゆまぬ努力があるということだ。劉徳華の成功は、香港の多くの平凡な、ごく普通の人が、心に抱いている夢想を彼に託して実現してもらっているということにある。彼を支え愛することは、自分の心の中の夢想を支えることになる、というわけだ[6]。

この「普通」というキーワードは、後に述べるように若者・大学生の傾向とも関連する。

二　大学生が語る「香港の今の流行」

機会をつくって数人の大学生に集まってもらい、彼らの関心のありどころや、彼らが思う「香港の今の流行」について語ってもらった。以下に原資料を紹介する前に、いくつかお断りしておくと、やはり言葉の問題が大きかった。筆者はほとんど広東語ができず、彼らの側は仲介役兼通訳の大学院生のほかは、五人の学部生全員がみな普通話は筆者より不得手という状況があって、互いに十分に意が尽くされたとは言いがたい。あとになって、もっと微妙な問題も聞いてみたかったと思ったが、その場ではひたすら意思疎通に腐心するしかなかった。おぼろな輪郭、何らかの傾向のようなものをつかめていただけたら幸いである。（　）内は筆者の注で、長い説明を必要とするものは「(二)　解説と所感」のなかで言及した。

(一)　大学生たちの話

「流行」といえば、まずＭＫ（旺角：モンコック）ルックだろう。若者の町モンコックでは十代の若者たちがその時どきに流行の、同じような格好で闊歩しているので、総称としてＭＫルックと呼ぶ。すこし前までは幅広の黒いズ

ボンが流行っていたが、今はもうちがうようだ。「黒社会」（やくざ）映画の影響だと思う。また、「ロリータ」ルックの女の子もたまに見かける。これも六、七月ごろ公開された日本映画『下妻物語』（今年春の香港映画祭にも出品された）の影響だろうが、まあ、よほど勇気のある女の子がするだけで、みんながやっているということではない。要するにこれはコスプレ（costume play）であり、漫画の主人公、たとえば日本の漫画「鋼の錬金術士」の格好をして歩く若者もいる。ただし、こうしたファッションは、中学・高校生世代のやるもので、自分たちはやらない。

　こうなれば話題は漫画だ。これは、小中高生ばかりでなく、自分たちもよく読む。一九九七年ごろからComic World〝漫画節〟という催し物が始まり、はじまりは自発的なものであったが、現在は官サイドで組織的に行なっている。今年も八月はじめの二日間、湾仔で開かれたブックフェアの一環として催された。多くの大学に漫画サークルがあり、もちろん嶺南大学にもある。日本の漫画の流行は他の文化にも影響を与えており、たとえば「ほんとうにあったできごとを改編した漫画」と言われている「電車男」に影響を受けた小説も書かれている。[7]

　音楽は、やはり外国よりは香港の歌手の歌っている歌が人気がある。今の時点では九月の香港ディズニーランドの開園を控えて、そのテーマソング「他約我去迪士尼」（彼があたしをディズニーランドに連れてってくれる）を歌っているKelly Jackieという新人女性歌手がブレイクしている。[8]大物スターの張学友もよき父親のイメージを買われて、目下、ディズニーランド大使としての広報活動に重点をおいている。そのほかテレビ・ドラマの流行とあいまって、たとえば、ドラマ「浪漫満屋」の主題歌を歌っているRain[9]のような韓国の歌手の活躍も目覚しい。目下の芸能界の話題としては、七、八〇年代を風靡した徐小鳳（ポーラ・チョイ）という大物歌手の復帰も忘れてはならない。

　社会的なイベントの〝香港小姐〟（ミス・ホンコン）選出はもう何年間も行なわれていて、今年も八月後半に行なわれた。新たな話題は、今年はじめて〝香港先生〟（ミスター・ホンコン）選出がスタートしたことで、もうすでに選ばれている。

　テレビの韓国ドラマブームの影響で、ハンバーガーショップのメニューに韓国風〝焼餅〟（ピンデトック？）が加わったことは、若者たちにとってはありがたい。

　若者たちの好きなテレビ番組は「American Idle」というアメリカの番組をまねた「残酷一叮」という視聴者参加番組だ。視聴者が得意技を披露して、ゲストのタレントがもうたくさん、と思ったところで鐘をならす。獲得賞金は演じた時間に比例する。

　映画はほんとうに見たいというより、話題づくりのために見る。カラオケにはわりあいよく行く。昼間のすいてい

る時間に行くと、食事・飲み物つきで三〇元（四五〇円前後）くらいですむので、食事を兼ねたり、時には暇つぶしのために行く。

スターバックスはどこにでもあるが、値段が高いのであまり行かない。旺角などに行くと〝楼上Café〟という、二階や三階にある小規模なテーマ・カフェが流行っている。入れる人数が限られているから静かだし、テーマに関心がある人が集まっているので、居心地がいい。テーマとしては、「ハローキティ」は室内がピンク一色に塗られていて、関連グッズが飾られている。「犬・猫」がテーマの場合、インテリアや置物が犬とか猫であるだけでなく、本物がいていっしょに遊ぶ。ブルーのインテリアを基調とした「カスピ海カフェ」もある……と言った具合だ。

しかし何と言っても一番関心があるのは、ケータイ電話とインターネットだ。日本製品が圧倒的だが、最近は韓国製のものも増えてきている。パソコンは家庭によってはひとり一台という家もあり、夕食が終わったらそれぞれ部屋に引きこもってパソコンに向かうのが日常化しつつある。寮ではテレビはコモンルームに一台しかないし、二局四チャンネル（それぞれ広東語中心と英語中心になっている）しかないテレビはあまり見ない。それよりはインターネットでニュースや好きなスポーツ観戦をしたり、お互いのウェブ上日記をのぞきあったりする。Blog に Forum 討論区というものがあって、なかでも今人気があるのは Mini Forum というのと〝高登〟というサイトだ。ここでおしゃべりしたり討論したりするのが、とても楽しい。引きこもりとかオタクになるというような心配はないが、それよりもそこに参加する態度の「虚偽性」が気になる。相手の話もどのくらい真実かわからないし、自分自身も書いているうちに、どんどん「作ってしまって」、現実の自分と乖離していくのがわかる。

あと、流行っていることといえば、ジプシー占いの一種である搭羅牌（タロットカード？）というカード占いだ。恋愛、悩み、仕事などについて占う。占いとは違うが、同じような〝迷信〟の範疇として、水晶玉のブレスレットをするのが流行っている。ピンクは愛情運を、黄色は金銭運を、透明ななかに緑の筋や点の入った緑幽霊（グリーンファントム）は事業（仕事）運を、最も一般的な透明のものは心の安泰を守る。

㈡　解説と所感

以上、とりとめのない彼らの話をそのまま紹介したので、以下にすこしばかり解説を加え、所感を述べてみる。学生のなかでもとくに流行（ファッション）に関心のある学生は、すこし年上の層が読む『MEN'S NON-NO』を、毎月六〇元（九〇〇円弱）出して買っているということだった。おしゃれのTPOが明白に示されているので、参考になるという。こういう学生は流行文化の項目それぞれに自分の意見があって（単に、世間

ではこうなっているという説明以外に）、他の学生にくらべ日常生活のなかで比較的My styleを貫いているような印象を受けた。インターネットの「虚構性」の問題について言及したのも彼であった。これは、あとで述べるように「普通」という生き方が一般的とされる香港の若者のなかでは、それなりの主張をもっているということではないかと思う。

　というのは、例えば林奕華のように、香港の若者たちは公開の場で意見を述べたがらないこと（後述の懇親会などの出し物を見ると、目立ちたがらないのとはちがう）や、彼らのなりたいものが「普通の人」であることを指摘し、それが自己防衛であることも知りつつ、最後には檄を飛ばしている。

> われわれが「平庸」な社会で「創意」を声高に言い立てるのは、まるで「裸の王様」みたいだ。目の前のドラマが喜劇なのか悲劇なのか、香港人はもっとよく見、考え、問うべきだと思う。とくに自分自身にこう問うべきだ。「普通の人になる」以外に、「何ができるのか」と。[10]

　彼はまた別のところで、大人にならない（なりたくない・なれない）kidultの問題も取り上げているが[11]、香港では宗教的背景をもった団体が『Kidults』という無料の小雑誌を出していたりして、この現象が商品化の方に行っているらしい日本とはまた違った意味で、ポップ・カルチャーの一項目になっていることはたしかだ。

　ところで一口に漫画と言っても、いくつかの流れがあるのではないかと思う。五、六〇年代ころはもともと〝公仔書〟（子どもの本）と言って、とくに大陸の連環画などをさしていたが、七〇年代の消費文化開始とともにどっと入って来た日本の漫画の方にシフトされてきたようだ。こちらは文字より絵が多く、動きが感じられる。「漫画」とそのまま呼ぶ。

　もちろん小さな子ども向けの漫画もあるし、一コマあるいは四コマなどの、いわゆる諷刺漫画もみな「漫画」なので、実態はあいまいだ。漫画の流行については文化人たちも軽視できず、たくさんの論評がなされているようだが、本特集では他にも論考があるようなので、ここではあまりふれない。最近耳にした話では、近ごろ日本語を学びたいという学生が増えているので、日本の漫画の影響かと思ったら、日本の歌手が歌う歌を歌えるようになりたいのだとか。筆者の周辺の若い人は、木村拓哉のいるＳＭＡＰのことだろうと言っていた。

　つい最近行なわれた学期開始前の入寮式（学生主催）では、バックグランド・ミュージックとしてずっと「ゲゲゲの鬼太郎」が流れていた。「たのしいな。お化けの世界には学校も試験もなんにもない」という原語の意味を知ってかけていたのだとしたら、かなりのユーモアだ。数日後に開かれた懇親会ではグループごとに出し物をやったが、テレビ番組「残酷一叮」やミスター香港・ミス香港のコンテストをもじったコントなどでおおいに会場をわかせ、やはりテレビの影響は大きいと思った。

　また、学生たちの話に出ていた「楼上〇〇」あるいは「二階〇〇」というのは、一階は土地代が高いことから上にあるよう

学生会選挙演説で踊る学生たち（嶺南大学）

になったものらしく、旺角や銅鑼湾のような繁華街にあるその種の書店も有名だ。筆者も時々利用するが、大きな書店やチェーン店とちがって、二、三割、割り引いてくれる。内容的にも、主流書店の足りない部分を補っているようだし[12]、繁華街のせまいビルの階段を上がっていく時の感覚は、まさに「香港」なのではないだろうか。いずれにせよ、学生たちの言うテーマ・カフェも、漫画カフェやインターネット・カフェのようなすでに市民権を得てしまっているものではなく、もっとマイナーで、マニアックな印象を受けた。

インターネット、あるいはパソコンはほとんど全寮制に近い学生たちには、絶対なくてはならないものになっている。第一、大学からの連絡も掲示とともに、学生個々にメールが送られてくる。筆者はふだん日本で使っていたアドレスのみを使用して、嶺南大学から渡された方を見ないでいたら、図書館の図書返却勧告（期限前の予告からはじまって、何度か）がきていたのに気がつかず、一か月も滞納して、一冊一日二元の罰金をしっかり取られた。

それはともかく、インターネット上で拡大していく虚構性については、自覚的な若者は自ら危惧しているし、識者も注視するところだ。先にも触れた林奕華は、ＩＣＱをもじった「I seek U」（わたしはあなたを探している）という評論のなかで、オンライン・ゲームという擬似世界のなかで、責任をとらずに自分の気に入ったことだけやる（人とだけ付き合う）ことが、現実世界に直面するときの態度をゆがめているという問題を指摘している[13]。たしかに一時期は、それが原因の犯罪事件なども起こったそうだが、こうした現象に対し社会が経験をつんでくると、大学生などはもうすこし割り切れるようになってきているようだ。ある意味では、話題づくりとしての映画鑑賞、時間つぶしや「これをもっている、あるいはこれができる」という見栄のための電子ゲーム（ソニーのＤＳＰ、任天堂のＮＤＳ）やアップルのiPodのような携帯型音楽プレーヤーなども同じだが、学生たち個々の真情（ほんとうにやりたいのは何かという気持ち）とはやや距離（乖離）があるような気がする。流行文化というのは、もともとそんな要素を含んでいるのかもしれ

ない。総じて大学生である彼らが「流行文化」について語るとき、「普通はそうであるが、自分たちは必ずしもそのとおりではない」という姿勢だったのが、印象的だった。

蛇足ではあるが、一般的な流行現象としては、女性にとっては絶対的に「ダイエット」のようだ。三〇代半ばの女性に、とつぜん「今、香港で一番流行しているものは何か」と聞いたら、即座に「ダイエット」という言葉が返ってきた。筆者の周囲でも恋愛をしているらしいある女性は、必要とも思われないのに栄養士に相談に行ったり、食事の自己規制を行なっている。さまざまなメディアの広告を見ていても、美容・化粧品関係、食物・サプリメントの類に関するもの多く、年齢がさらに高くなれば健康問題ということになるのだろう。なお細かなことだが、女性の服装に関して、ちょっと気になったことがある。日本のみならず台湾や大陸でも、夏の暑い頃、中高年の女性が普段着として風通しのよい簡単服を着ている姿をよく見かけるが、香港ではほとんど見かけない。筆者のこの疑問に対し、そばにいた若い女性が「香港は生活のテンポが速いから、そんなものを着てゆったりなんかしていられないのではないでしょうか」と答えた。生活のテンポが速いのは香港にかぎらない。考えてみる価値はあると思うのだが。

三　記憶と「香港故事」

ところで、これまでに触れた素朴な疑問や感想について、筆者の限られた読書のなかでも、識者がすでに言及している例もある。たとえば、長い滞米生活のあと近年香港に拠点を移した著名学者李欧梵も、香港を〝打気〟（元気づける）し、香港文化とは何かを考える文脈のなかで、いくつかのことを指摘している。氏は、中国復帰の前後はあれほど〝認同〟（アイデンティティ）問題が騒がれながらも、五年後にはもうあまり話題にされなくなっていることについて、やや皮肉っぽくこう言う。

> おとなしく中華人民共和国の特区公民となり、特区のパスポートと〝回郷証〟を手にしたが、中国にも外国にも行けるので、祖国の人間より便利だ。これこそ「一国両制度」の賜物である。[14]

氏は、〝認同〟問題が騒がれなくなった理由として、結局、香港人の深層構造はもともと中国式で、イギリス文化は日常生活の風俗習慣を取り入れたのみで、すぐに漢化させてしまった。表面的に受け入れたにすぎなかったのだとする。そして復帰後は〝本土化〟（香港自体の文化を重視すること）、とりわけ嶺南文化（一般に広東・広西省以南を指す）が意識され、広東省にある珠江以北はもう北方と呼んでいる状況を指摘し、さらに見過ごせないこととして、日本の通俗文化の影響をあげる。

こうした心理上の南北区分は、とうぜん一種の自己防衛（自我保護）の仮の姿でもある。しかしこのことは、香港人が〝普通話〟を学習することをさらに困難にさせている。北京を中心とする祖国の文化に対して、冷淡で受身的な気持ちを抱いているようなのである。これは香港の大学

生のあいだにとても顕著に現れている。わたしは、香港の若い人たちの日本の通俗文化に対する憧れは、祖国の文化に対するそれよりもはるかに上をいっているのではないかとまで思う。もしもこの推測が正しければ、それなりの危機を生み出す可能性があるだろう。[15]

氏の見方が香港の識者のすべてを代表するとか、氏の危惧がすべての若者に当てはまると言うのには、香港はあまりにも重層的だが、前章で若者の流行文化をとりあげたので、今回はこの文脈に沿って、識者のありようを、小思と也斯を例に見てみたい。一九三〇年代香港生まれ、香港育ちの女性作家小思は、二〇〇二年に香港中文大学を退職したが、長い間、中高等教育に携わっていたこともあって、早くから後代の教育に目配りをしてきている。版を重ねて、改訂版も出している『香港文学散歩』は文学に関心のある人が香港を歩き回るには初歩的なガイドブックになるし、「個人の回想と文学思考」というサブタイトルのついた『香港故事』は、変わりゆく香港の景観を惜しむとともに、以前の景観がもっていた歴史的意味合いを書き込んで、後代に語りつごうという意図が明らかだ。そういう意味では本報告参考文献のなかの『香港風格』『香港記憶』など、同じスタンスで書かれたものは枚挙にいとまがない。

小思は香港を「身の上のとてもあいまいな都市」としてとらえ、外部からの「中西文化交流の中心」、および「文化沙漠」という毀誉褒貶に対して、香港に生まれ育った側から、ものを申そうとしている。

香港は過去の身の上をふりかえってかまっているひまはない。ひたすら前に向かって世界の潮流にぴったりと追いつき、急激な新陳代謝に適応するべく努力するしかない。これが香港の命のリズムなのである。元から香港に住んでいた人たちが一時期この都市を離れ、また戻ってくると、もともとよく知っていた街頭に立ってもどうしていいかわからない。時には異郷人のように他人に道を聞かなければならない。以前の建物が壊されているだけでなく、ポスト・モダニズム建築とやら高架橋が目の前にあって、すべての景観がまったく目新しいものになってしまっているからだ。

香港で生まれ育った人間として、わたしはよく香港人の個性と特徴をまとめて、遠くの友人たちに紹介してみようと考えるのだが、実際にやってみると、けっして容易なことではない。おそらくその変化の多さのせいだろうか、いつもじっくり考えてみようとするたびに、わたしは強烈な感情の網にはまってしまう……愛憎がはっきりしないのだ。[16]

こうして、自分の知る香港の記憶、とくに景観とそれにまつわる心情について文字化し、後代に伝えようとしている。おそらく香港人の一人ひとりが、とくに作家たちは、自分の「香港故事」をもっているのだろうが、この言葉は実は一九九七年の復帰を記念して正式にオープンした香港歴史博物館の前身である、香港博物館の展示に使われた言葉で、現在の歴史博物館の

常設展のメインテーマともなっている。筆者は香港博物館時代については知らないが、古代からはじまる時代別展示のなかには、当然、「三年八か月」の日本占領時期も含まれている。「グルメとショッピングの香港」を訪れた旅行者にはすこしきつい体験になるだろうが、日本からのパック旅行などに、どの程度組み入れられているのだろうか。「三年八か月」に対する歴史認識は、この四月に起きた反日運動、八月の抗日戦争勝利六〇周年の流れと、とくに七〇年代以降日常生活に深く浸透している日本製品、それが引き連れてくる日本文化と、九七年以降、徐々に進められている愛国教育（歴史博物館の建設、マスメディアの広報、教育……）のなかで、どういう果実をつけはじめていて、その折り合いはどうつけられていくのであろうか。英国統治の影がすこしずつ薄れていくと、このあたりの拮抗が澱のように残るのではないだろうか。先の李欧梵の危惧はまさにその時期に表明されていたが、香港のポップ・カルチャーは、この拮抗と、この土地の地理的歴史的な伝統である、諸外国文化への目配りとのなかで、日々更新されていくのではないかと思う。

同じく「記憶」を問題にし、香港文化について考えるにしても、六〇年代に大学生生活を送った也斯には、またすこし別のスタンスが感じられる。これは、ひとつには彼が比較文学出身であることとも関係あるかもしれない。彼は小説「剪紙」や長編小説「記憶の都市・虚構の都市」などで小思にも見られた焦燥感を作品化し、即事即応とも言える大量の詩作でもって、小思の言う「香港は過去の身の上をふりかえってかまっているひまはない。ひたすら前に向かって世界の潮流にぴったりと追いつき、急激な新陳代謝に適応するべく努力するしかない」を実行している人だ。欧米に身を置いたときの詩作を中心にした詩集『東西』に象徴されるように、彼は異なる文化の融合や共存に関心をもち、矛盾や対立する事物・現象をあるがままに受け入れているように見える。彼は一貫して香港文化は「雅」と「俗」の融合したものという観点にたち[17]、文学だけでなく映画やアートへの目配りも怠らない。最近の著書『也斯的香港』はそんな思想とポップ・カルチャーの重要な要素であるヴィジュアル化、ここでは写真との今日的な融合と言える。

詩人・小説家の也斯（右端）
（左から２人めは「駐校作家」の王安憶）

中に採られている詩「盆菜」（大鉢料理）は、さまざまな事物事象の融合という内容ばかりでなく、文学創作と食べ物、時にはさらにアートまでを結びつけて活動している也斯の面目が出ていると思うので、ここに訳出してみる[18]。

大鉢料理

アヒルの丸焼きと油焼きのエビは
もちろん天辺にのせなくちゃ
階級の秩序は　各層が一目瞭然
だけどだんだん
挑戦的な箸にひっくり返えされてしまう
客家村の　五つ味のトリとザラザラのブタの皮
宋朝将軍の落武者たちは　戦い敗れてこの地に逃れ
ひとつの大鉢で　漁民のたくわえに舌つづみ
砂浜で車座になって食べている姿には
もはや昔の栄光は見られない
花のみやこは今遠く　しばし村人の野趣を味わう

高いところで虚勢をはってもいられず
日ごと消耗して下がるだけ
ほんとの気持ちは知らないが
底辺の色に染まるのも難しい
やがて　北のしいたけと南のイカは裂けない仲に
関係がひっくりかえって　潔癖な上も色にそまる
肉汁の落ちてくるのは　誰にも止められない
底のダイコンは自然のうまみで
濃厚な香りをそっくり吸いとる

結局、いちばん底のダイコンがいちばんおいしそうだが、食べられる運命には変わりない。也斯の説明によれば、一般に、香港の伝統的な食べ物は、広東の客家料理の流れをくむ料理と潮州料理から来ていると言われるが、この大鉢料理はそれよりさらに古いとされる客家料理に属するという。「客家村」の原語は〝囲村〟で、客家の自衛防壁型の集落をさすそうだから、中国から香港に集団移住した農民の伝統的な料理なのだろう。そのなかの正月や節句に食べる大鉢料理は、宋代まで遡ることができるという。言い伝えによれば、文天祥将軍（宋代の愛国的将軍）の軍隊が退却して香港新界の元朗あたりまで来たとき、農民たちが間に合わせにある限りの食べ物を大鉢に入れて出したことから発展してきたとか。もともと寄せ集めと借用・転用のニュアンスがあるようだ。ちなみに元朗のあるレストランでは、季節になるとこれを復元した料理を食べさせてくれるそうである。

どうやら也斯は、歴史的地理的な融合である香港について、現状認識の方に力点をおき、そのことを文学化し作品化していくなかで、若者といっしょに考え、何かを探るという方法をとっているのかもしれない。だからだろうか、氏の発言に、若者に対することさらな批判や直言はあまりみられない。むしろそれは、氏のもう一面（もうひとつの事業）である実際の大学教育のなかで実践され、トータルとして香港の将来を身に引き受けていくということなのではないかと思う。

最後に、このような也斯（嶺南大学教授：梁秉鈞）のポップなあり方として、先学期に行なったユニークな授業を紹介させてもらいたい。嶺南大学が屯門というところにあることはすでに紹介したが、彼は「創作」の授業で、学生たちに「屯門故事」を作らせることを試みた。まず歴史的事跡などの見学や資料調査で知識を得させたあと、実際の創作と並行してゼミで論議を行ない、事物観察、認識、創作のそれぞれの方法・手法について、相互に練磨させるとともに、適度な助言によって、それらを自己発展させていくのである。筆者も学生の断片的な通訳に助けられて、調査小旅行の段階から参加したが、当初は見学個所に対してあまり知識も関心もなさそうだった学生たちが徐々に積極的になっていき、最後は口頭発表会まで行なった。こうした過程は、先の小思の想いのなかにあった「あいまいさ」や焦燥感に対して、文字通り、足元から確認していく作業なのだと感じた。日本人の苦手な「歴史認識」の問題に、こんなやり方も参考にならないだろうか。

小論の執筆に際し、嶺南大学の梁秉鈞教授（也斯）をはじめとするスタッフと学生諸君に多大な協力と啓発を受けるとともに、香港のポップ・カルチャーに詳しい加藤浩志氏にも有益な助言をいただいた。心から感謝をささげる。

注

〈1〉林奕華『等待香港　文化篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年、五九頁。

〈2〉『太陽報』二〇〇五年五月六日。

〈3〉「第二九届香港国際電影節プログラム」香港国際電影節協会、二〇〇五年、三四頁。

〈4〉李照興『香港一〇一　愛恨香港的一〇一個理由』香港：皇冠出版社、二〇〇一年、一七六—一七七頁。

〈5〉呉俊雄・張志偉『閲読香港普及文化』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年、二一六頁。

〈6〉林奕華『等待香港　娯楽篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年、七七—七九頁。

〈7〉香港のポップ・カルチャーに詳しい加藤浩志氏は筆者にこう語った。

「電車男」はインターネットの掲示板2ちゃんねるでの一連の書き込みを元に、パソコンの画面の雰囲気をそのままに出版物としたもの。漫画化も数種類されているが、香港への流入は漫画より小説（とは言い難いが）が先か。アスキーアート（コンピュータ上の文字や記号を利用して描かれた画）の多用が特徴的で、中には「サザエさん」や「ムーミン」、あるいは2ちゃんねるはじめネット上で共用されるキャラクター「モナー」や「おにぎりくん」などが登場、ネット独特の言語も頻繁に使われており、はたして日本人以外に理解されうるのか疑問であるが、香港はもちろん、大陸、台湾でも『電車男』のタイトルで翻訳されている。「電車男」という言葉に対し、それぞれの地域でどのようなイメージでとらえられるのか、興味深い。

〈8〉kellyjackie はハンドルネームで、インターネット上で作品を発表しているシンガーソングライター。一九八六年生まれの受験生。本名は陳暁琪（ジャッキー・チャン）。ハンドルの由来は本人が陳慧琳（ケリー・チャン）のファンだからということである。「他約我去迪士尼」は二か月間でのべ二〇万回ダウ

ンロードされ、大ヒットとなったという。

〈9〉情報通によれば、「浪漫満屋」は日本では未放送だが、ファンの間では「フルハウス」で通っているとか。Rain の日本での通り名は〝ピ〟である。

〈10〉林奕華『等待香港　青春篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年、一五頁。

〈11〉同右、四八頁。

〈12〉李照興、前掲書、一二五頁。

〈13〉林奕華、前掲『等待香港　青春篇』、三四―三六頁。

〈14〉李欧梵『尋回香港文化』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年、一頁。

〈15〉同右、三―四頁。

〈16〉小思『香港故事』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年、三頁。

〈17〉これについて、也斯は、李欧梵も同じような考え（「香港の文化は雅俗が共存し、伝統的なエリート知識人が座して道を論ずるというような現象は起こりえない」）であることを紹介している（『也斯的香港』一一八頁）。筆者が也斯に直接確認したところでは、李氏の場合あくまでアカデミックな範囲で語っているところがあるが、自分の場合はポップ・カルチャー（流行文化）も視野に入れているので、内容的に少し異なる、というようなことであった。

〈18〉日本ではすでに四方田犬彦訳「香港の大皿」（四方田犬彦編集『言語文化』第二一号、明治学院大学言語文化研究所、二〇〇四年二月所収）があるが、ここでは筆者訳を採った。

参考文献

何濼生『二十一世紀香港新一代的成長』明報出版社、二〇〇五年。

胡恩威『香港風格』CUP出版、二〇〇五年。

辜健『香港記憶』文学世紀社（二〇〇四あるいは五年。掲載なし）。

呉俊雄・張志偉『閲読香港普及文化』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年。

小思『香港故事』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年。

小思『香港文学散歩』教育署課程発展処校本課程（中学）組、二〇〇二年。

鍾国強『城市浮遊』香港芸術発展局、二〇〇二年。

張錯『尋找張愛玲及其他』時報出版、二〇〇四年。

陳冠中『我這一代香港人』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年。

潘国雲『都市学――香港文化筆記』kubrick、二〇〇五年。

香港電影資料館節目組編『七彩都会新潮――五、六十年代流行文化与香港電影』香港電影資料館、二〇〇二年。

也斯『記憶的城市・虚構的城市』香港：牛津大学出版社、一九九三年、二〇〇〇年。

也斯『東西』香港：牛津大学出版社、二〇〇〇年。

也斯『也斯的香港』香港：三聯書店、二〇〇五年。

也斯『香港文化』香港芸術中心、一九九五年。

李欧梵『尋回香港文化』香港：牛津大学出版社、二〇〇二年。

李照興『香港一〇一　愛恨香港的一〇一個理由』香港：皇冠出版社、二〇〇一年。

梁秉鈞（也斯）編『香港的流行文化』台北：書林出版有限公司、一九九三年。

林奕華『等待香港　娯楽篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年。

林奕華『等待香港　青春篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年。

林奕華『等待香港　女人篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五

年。
林奕華『等待香港　文化篇』香港：牛津大学出版社、二〇〇五年。
「第二九届香港国際電影節プログラム」香港国際電影節協会、二〇〇五年。